

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

女子の長距離走（マラソンか、一万メートル走かだった）のゴールのシーンをカメラが映し出していた。そして、ありつたけの力をふりしぼってゴールした日本人選手は、ゴールしたとたんに、ヨレヨレになって崩れ落ちるか、誰かに肩を支えられてようやく歩けるといふうだった。肩を支えられて歩いていても、今にもぶっ倒れそうである。

ところが、外国人選手はそういう様子ではないのだ。その人も全力を出しきって走ったのだろうか、軽く筋肉をほぐすための走りをしたり、屈伸運動をしたりしている。いい走りだったと祝福されれば笑顔で応じたりしている。

なのに日本人選手は、表情を作る余力もなく、失神寸前という様子なのである。それは成績には関係ない。一着だったとしても、残念なことにビリだったとしても、同様に、ぶっ倒れそうなのである。

それを見て、その評論家（スポーツ評論家ではなく、社会評論家）はこう言った。

「あんなふうには、日本人選手がフラフラの様子を見せるのは、それが日本の文化だからなんです。そう言われてすぐには納得できなかった。あれは別に演技でやっつてることじゃないだろう、と思っただのだ。そんな計算ずくのものではなくて、本当に、疲れてぶっ倒れる寸前まで頑張ったので、ゴールしたらもうヨレヨレなんだろうと。」

でも、同様の事例を何回も見ていくうちに、私にもだんだんその人の言ったことが当^{あた}っているように思えてきた。欧米人は体が大きくて基礎身体能力が高いのに対して、小柄な日本人はありつただけの力を使いきるからあなる、と考えたこともあるのだが、体格が日本人とそう変^{かわ}らないアジアの国

の選手も、日本人のように倒れ込まないのである。日本人の運動能力がよほど低いのかと考えるところだが、それにしても成績はそう悪くないのである。決してビリではなく、一着とか二着だったとしても、立っていられないくらいにグロッキー状態なのだ。

つまり、日本人がスポーツマンに何を求めるか、という文化の中から、あのフラフラ状態というのは出てくるのだろう。日本人はスポーツに、死ぬほど頑張つて、その精神力のおかげでいい成績をあげる、という物語を求めるのだ。選手たちももちろん、そういう精神力神話の信奉者である。彼らは心から、気力で闘い抜きます、と思つているのだ。

そうすると走り終えた時、作^{わざ}でも演技でもなく、気力を出しきった姿になつてしまふのだ。だからゴールするともう、立っていることもできないのである。

ただし、ゴールインした長距離走選手の様子が、時と共に変わってくるということがある。日本人選手というのはヨレヨレになるんですね、と言われて、なるほどそれが日本の文化だからなのか、と私が思っていたのは二十年も前のことなのだ。

その後、少しずつ日本のスポーツマンの様子が変わってきたことに、皆さんは気がついているだろうか。たとえば、リレハンメル・オリンピック（一九九四年）のスキーノルディック複合団体で金メダルを取った日本チームの、荻原健司選手などがその新しい日本人スポーツマンだった。彼は好成績を素直に喜び、爽やかで、どこにもなにわ節的なところがあった。彼を見た時、我々は日本のスポーツマンに新しいタイプが出現したと感じたものだ。

（清水義範『行儀よくしろ。』ちくま新書より）

（注）失神：瞬間的に意識がなくなること。グロッキー状態：フラフラの状態。

信奉者：一途に信じる人。作^{わざ}：わざとずる行為。

ノルディック複合：雪の野山を駆ける競技とジャンプ競技を組み合わせたスキー競技。
なにわ節的：人情に訴えるものごとや態度のこと。

問一 この文章では、スポーツマンの姿として二つのタイプが示されています。①それぞれのタイプのふさわしいタイトルを「くタイプ」という形で「く」の部分で**五字以内**でつけて、②それぞれのタイプの**特徴を三十五字く四十五字**で書きなさい。

問二 あなたは、ゴールしたスポーツマンがとる態度として、文中の二つのタイプのうち、どちらのタイプを支持しますか。支持するタイプのタイトルの（問一で自分がつけたもの）を最初に書き、支持する理由を**四百五十字程度**で書きなさい。